

平成14年度 全知P連子育て支援事業

「休日・放課後における障害児の地域活動促進事業」

児童・生徒の地域活動を充実するためのセミナー

東京ブロック報告

東京学芸大学教育学部附属養護学校

1. 日時 平成14年11月16日(土) 10:00~15:00
2. 会場 東京学芸大学 芸術館(裏面地図参照) 〒184-0015 小金井市貫井北町4-1-1
3. 日程
9:00~ 受付
10:00~10:10 開会式
10:10~11:15 講演
11:15~12:10 実践報告
12:10~13:00 昼食
※ パネル展示をお楽しみ下さい
13:00~14:45 シンポジウム
14:45~15:00 閉会式

4. 講演

テーマ「地域を創る・地域で育つ」

講師 東京学芸大学 加瀬 進 先生

5. 実践報告 : 地域活動への創造と失敗と工夫と成就感と!!!

- 報告者 渡辺 美佐子 (東京都立矢口養護学校PTA)
- 報告者 中谷 慶子 (東京都立港養護学校PTA)
- 報告者 森 和子 (東京学芸大学教育学部附属養護学校PTA)

6. シンポジウム : 何か自分たちの活動へのヒントが見つけれそうな・・・予感

テーマ【地域活動の充実へのわたしの願い・動き】

- 話題提供者 田中 恵 (東京都立石神井養護学校PTA)
- 話題提供者 井上 正直 (東京都立南花畑養護学校教頭)
- 話題提供者 原 智彦 (東京都立あきる野学園教諭)
- 話題提供者 三輪 禎子 (東京学芸大学教育学部附属養護学校教諭)
- 指定討論者 上西 陽子 (東京都立中野養護学校PTA)
- 指定討論者 深井 敏行 (東京都立府中朝日養護学校教諭)
- ◎ セミナーのまとめ 渡邊 和弘 (東京都立板橋養護学校校長)

主催 : ・全国知的障害養護学校PTA連合会
・東京都知的障害養護学校PTA連合会
・東京学芸大学教育学部附属養護学校PTA

当日参加者 120名

内訳 (保護者95名 教員25名)

パネル参加校 17校

地域を創る、地域で育つ

加瀬 進（東京学芸大学）

1. 最後の再確認：乗り越え、実現したい課題は？

- 1) 不毛な「連携」論から、実績を元にした「連携」準備へ
 - ・「在学中は学校にお任せ！」という言い分と、「学校はここまで、あとは福祉！」という言い分と。
- 2) 本人の育ちを豊かにするための保護者ニーズ（資料参照）
 - ・地域社会（街）で暮らすリアリティーの育ちには、学校と家庭を含む地域社会に、学校と家庭とは異なるもう一つの育ちの「場」と「内容」と「人」（＝地域活動）が必要。
- 3) 地域活動づくりは山頂ではなく、地域を創るための峠越え
 - ・できるところから始める地域活動を、始めた人の資源ではなく地域の資源に、集う人たちが一人一人の本人を中心に住民サービスを構想する拠点に育てていく方向を見失わない。
- 4) 今の生活を振り返ったときに
 - ・学校・家庭以外にどこへ行っているか、誰とおつきあいをしているか（本人と保護者）

2. 学校五日制を「地域を創る、地域で育つ」好機と捉えて

- 1) 地域づくりの核は人的資源
 - ・「リピーターは感動と心地よさから」
- 2) 地域活動の内容は「地域社会（街）で暮らすリアリティー」から
 - ・本人の興味・関心を見捨てるのではなく、興味・関心をかき立てつつ、「暮らしの世界」へ誘う。
- 3) 地域資源への移行を見据えた情報収集とセンサー「場」のバリエーション
 - ・地域資源化をめざす施設、地域生活支援センターを志す人材が求める新たなシェア。

3. 「地域で育つ」ことの意味を具体化する

- 1) いい人も悪い人もいる地域社会の中で生きていく
- 2) 住まうかたち、働くかたち、楽しむかたち、学ぶかたち、愛し合うかたち等をライブで学ぶ
- 3) 寄り添うパートナーを地域にもつ

2. シンポジウム

話題提供 1 「小さな一歩を繋いで“ゼロからの出発”」

田中 恵(東京都立石神井養護学校PTA)

1. 「子育て支援事業」とのかかわりを持って 余暇活動への目覚め：一年前のきっかけ
2. 完全五日制へのアンケートの実施 必要性は半々の反応(学年による)、活動への協力について(定例化し、楽しい時間を提供)
3. 今年度取り組みの余暇活動の実際 年間9回(土・日開催、多様な活動を計画・実施)
4. 見えたきた課題 ・ボランティア登録制度の開始 ・参加者募集のやり方 ・保護者の意識改革 ・保護者のレスパイトと子どもとの関係 ・先生方のパワー取り入れ

話題提供 2 「学校から地域へ」 原 智彦(東京都立あきる野学園養護学校教諭)

1. ボランティア養成講座の必要性
ボランティア不足から養成講座を開始(平成10年)、介護等体験(平成11年度～)
2. 「ボランティアサークル」の立ち上げと「夏の学校」の取り組み
地域でのボランティア養成(在学中になじみのボランティアを作り、卒業後へと繋ぐ。本人、家族、教員が支えられ、ボランティアも支えられる事の大切さ。)
3. 「楽しさ」を共有する
あきる野クラブ(PTA主催)：企画の大切さを学ぶ、PTA会長から教員への啓蒙、学校と教員・保護者がボランティアを蓄積していく時期、卒業後への広がり

話題提供 3 「地域で安心して楽しめる活動の場づくり」江戸川区での第三土曜の活動例

井上正直(東京都立南花畑養護学校教頭)

1. 実践事例「親子でボーリングを楽しもう」：毎月第三土曜日(居住地の小岩養護学校)
条件作り：三階の場内貸し切り、景品・賞状を準備、子ども達が期待を持つように
2. 私が考える地域活動づくり ①楽しむことが基本 ②こんなことをやってみたい！
③「また会おうね」と関係を深めて ④ちょっとやってみない？と呼びかけを広げて
3. 地域活動充実への期待、展望 ①各校・各地区の地域活動情報を得る ②学校から居住地域へ ③支援者の養成とネットワークづくり ④月1回ボランティア活動しよう
4. まとめ：できることの第一歩を楽しみながら・・・

話題提供 4 「生涯学習と支援の輪」若竹ミュージカルの活動を通して

三輪禎子(東京学芸大学教育学部附属養護学校教諭)

1. 卒業後の生活：働くことと楽しむことがあって、生き生きとした生活になる
仲間：ミュージカル大好きな仲間(卒業生、教官、保護者、若竹ミュージカルオーケストラ、多彩な支援者)、いろいろな年齢(卒業生でも30歳の年齢差)
2. ミュージカルを通じて広がる輪 ・多彩な支援者：活動への参加・周辺からの支援
公演活動を通しての地域の広がり ・自分の職場の人に自分たちの活動を紹介する
3. 大切にしてきたもの、そしてこれからも：本人達が生き生きと活動をしていること。

指定討論者

深井敏行(東京都立府中朝日養護学校教諭)

○5・6年前多摩ネット(多摩東部での学校五日制に伴う地域活動)の立ち上げ(府中・立川・小金井養護中心にその居住地域でそれぞれ活動を展開：地域での情報交換が大切)

指定討論者

上西陽子(東京都立中野養護学校PTA)

○PTAの中に組織を作ったの活動：定期的な土曜活動、ボランティア養成講座、保護者の意識を高める、活動を通して広がる輪(地域や協力してくれる人たちの広がり等)

II, セミナーのプログラムと内容

1, 実践報告

①実践報告1 渡辺美佐子(東京都立矢口養護学校PTA:矢口っ子クラブ代表)

テーマ:地域と共に歩む矢口っ子

(1)「矢口っ子クラブ」沿革:平成4年より「障害のある子ども達に地域での受け皿を」を合い言葉に矢口スポーツクラブがスタート。指導員は教員,運営がPTAであった。第2土曜日が活動日。毎回80名程度の参加。平成8年まで継続。その後,登録制から全校生徒参加型に変え地域の都立・私立高校にボランティアの募集。都立高校が協力。馬込小学校のチャンバラクラブが来校。平成11年,介護等体験に場を提供。同年矢口っ子クラブを設置。ボランティア講座開始。

(2)課題と問題点:生徒232名参加者は10%に満たない。原因はスクールバスが使用できない。2時間では短時間すぎる。プログラムに魅力がない。小中高の同一は問題。改善策を検討。時間延長・教員にも協力を呼びかける。委員の当番制は問題あり。

(3)本年度の取り組みと今後の展望:「大田区障がい者スポーツ指導者研修会」が年4回協力。「パネルシアター」「エアポリン」「高校生でもできるスポーツ」の3本立て。リピーターを増やすチラシ作成。学校と協力した工夫点多数紹介。

②実践報告2 中谷 慶子(東京都立港養護学校PTA)

テーマ:地域活動の取り組み

(1)地域活動づくり:PTAの学校5日制対策として「みかんがり」「水族館」「親子餅つき」等を取り組む中で居住地での活動へ発展させる工夫をする。関係の区への働きかけ,在住区保護者会(平成11年),ボランティアの養成等の条件づくりを推進。

(2)平成14年度の取り組み:地域活動部が「余暇活動づくり」と「進路にかかわる活動」に整理される。活動費が予算化される。年間に各地区1~1.5万円。各地区で工夫をしながら無理をしない企画を練る。

(3)今後:港区「親子プール」目黒区「親子でおやつ作り」品川区「ボーリング」地域活動通信発行。ボランティアの会との連携。区報に載った活動にも参加。失敗を恐れずに何かを始めていく……このことから始まった。

③実践報告3 森 和子(東京学芸大学教育学部附属養護学校PTA)

テーマ:地域社会へ生活を広げていくために

本校は,スクールバスは無く,一般交通機関での一人通学を目指してめざしている。地域の方との「ふれあい」という意味合いから,日頃お世話になっている駅やバスの営業所や,商店街に毎学期PTAも挨拶回りする。

(1)介護等体験:PTAが中心となって毎年600名の学生を受入。一日は除草などの作業と一緒に取り組む。終了学生対象のボランティア養成講座開設。実践力を養う。

夏休みの「夏の学校」に多く学生が参加。介護引率の大学教官が生徒対象のトランポリン教室を開催。

(2)駅前バザール:第2土曜日商店街のバザールに出店。本人,親子でフリーマーケットを楽しむ。作業製品も販売。商店街や通行人から出店を期待されてきた。

(3)夕涼み会:商店街,作業所と共催で取り組む夏のお祭り。本校運動場で行う。

Ⅲ. セミナー参加者のアンケート結果 (紙面の関係で代表的な意見)

1. 開催場所・日時について

- ・良かった(22) ・まあまあ(8) ・工夫してほしい(1) ・無回答(1)
- (1) 良かった→すばらしい内容なので、多くの人に聞いて欲しい。
- (2) まあまあ→土曜日1日通してというのは都合がつきにくい。
- (3) 工夫してほしい→土日以外の日。

2. 講演会について

- ・加瀬先生のお話が大変分かりやすく楽しく拝聴できた。(多数)
- ・地域の大切さを分かりやすく話していただいた。限られた輪だけでなく、広い範囲の「輪」が大切なことを改めて考えさせられた。それには協力・理解が必要不可欠。
- ・今、子どもは小さく、週5日制になっても家族で活動する時間が増えた・・·くらいの感覚でしたが、将来のことを考えると「地域を創る・地域で育つ」大切さを実感した。
- ・地域活動を町の財産に・・·活動づくりは最終目標でなく町づくりの峠である・・·という言葉をお忘れなくしたい。
- ・常に本人を間にはさみ「学校と福祉」どちらをと悩む日々もあるが・加瀬先生最後の言葉「同年代のパートナー(ボランティアとは違うパートナー)」の言葉に胸を打たれた。
- ・年齢ごとに家族支援ニーズについて分かりやすく説明してもらってよかった。
- ・地域での活動は、人的資源を大切にするとところから始まる・・·印象的だった。

3. 実践報告について (パネル展示含む)

- ・それぞれの学校の積み重ねてきた歴史が、パネルの写真を通してよく分かった。
- ・各地域でPTA活動としてよく頑張っている様子が分かった。地域の協力が得られると活動に広がりができ地域活動として定着していく過程で多くの支援協力が必要。
- ・さまざまな話題だったが、わかりやすい話だった。学校と居住地が離れているので地域について考えさせられた。
- ・各学校が工夫をしていることがわかったが、情報が広い範囲に伝わっていないと思った。
- ・報告なのでもう少し保護者たちの声はどうか?を聞いてみたかった。
- ・各学校を中心としたクラブ活動に工夫がなされていてとても良かった。

4. シンポジウムについて

- ・司会者のお陰で本当にアットホームな良い会になって良かった。
- ・一つひとつの話が大きな流れでつながっていて、話の方向性が分かりやすかった。
- ・子どもも親も一緒に活動してくれる方々も本当に楽しめる実りある余暇活動ができるといいなと実感した。
- ・自分でできること、子どもと親で協力してできることをしたいと思った。
- ・養護学校の学区は多市に渡っているのでPTA活動ではなく地域にもどしてゆくことが地域活動ではないかと感じた。
- ・大変有意義なシンポジウムだった。教員としての役割の発揮の仕方を考えねばと思

った。

- ・感心することばかり。豊かになってきたなと実感。東京はやっぱり進んでいる。ボヤボヤしてはいられません。
- ・ボランティアを集める苦勞が感じられた。ボランティア養成講座や、介護等体験の充実を願う。
- ・我が校でも今年よりボランティア養成講座を始めた。育てることの難しさにぶち当たっている。学校に限らず地域で活動してみんなを巻き込んでいきたい。

5, このセミナーを通して「障害児の地域活動を充実する」ことについてのプログラム案を企画するとしたらどのような企画にしたらよいか。

①活動内容

- ・土日活動に意識の薄い学校にこそ来ていただきたい ・月1回 ・無理のない程度
- ・月1回 ・年2回 ・土曜日 ・3連休のうちの1日
- ・グループ別のディスカッション ・教員の参加をもっと要請（同じPTAとして）
- ・地域の子どもと障害児が共に創る活動 ・個別プログラムが今後必要
- ・学区の小学校の体育館を使って、体操教室を月4回（土）開催している。大学生を指導者としているが地域の方々にも参加を呼びかけようと思った。

②期待される効果

- ・卒業後地域で生きる中で、少しでも楽しみを見つけることができる。
- ・地域の大学生や高校生の参加が期待できる。
- ・保護者の側の意識改革について、どうなったかを発表してもらえる機会が作れる。
- ・一人ひとりの個性にあった能力の伸長、その人の生活力が伸長する。
- ・地域差にもよるが、人材発掘の機会になる。

IV. 今後の本校の地域活動の展望

① 学校、学校種を越えた活動の場のバリアフリー化

参加しやすい、通いやすい活動の場は在校・出身校に限らず、近所に企画があればだれでも参加できる。

② 地域活動情報ネットワーク充実

インターネット、ポスター、FAX通信、テレホンサービスなど本人が求めれば情報が入所できるネットワークを公立・私立・国立間につくる。

③ 講師陣の特技バンク登録制度

自分の特技をバンクに登録しておき講師依頼に応える。現在、中年や高齢者がその特技を学校や老人ホームで活かしているが年齢をこえた小学生や中学生の特技を養護学校や心障学級の外部講師として活用する。

④ 大学生ボランティア・ガイドヘルパー・家庭教師の育成

東京都は「ボランティア養成講座」の対象が主に高校生であるので、本校は介護等体験の終了した学生のさらなる障害者の理解と支援方法の習得をねらった養成講座を継続する。個人の家庭教師として活躍している実例も複数あり、発展として保護者がクラスでまとまってバザーで資金を得てガイドヘルパーを雇う計画が進行中である。